"Beauty" for the Women of Our Age

——The Idea of the Beauty in *Bridget Jones's Diary*—

02E039 Tsubura Ohkura

<Abstract>

Many women might have thought that they wanted to be "beautiful". Women of our age are so obsessed with their appearance. Bridget Jones is the heroine of *Bridget Jones's Diary* (1996) written by Helen Fielding. It is really popular among the women all over the world because they identify themselves with Bridget who lives positively everyday even though she has some problems with her family, job and especially with her boyfriends. This novel is written as a diary by Bridget, a thirty-two years old singleton who is looking for "Mr Right". It starts with the record of her weight, and the amount of alcohol, the number of cigarettes and the calories she consumes each day. She is a women who always think about how to be more "beautiful" and "happier".

This paper focuses on the idea of beauty in *Bridget Jones's Diary*. In chapter one, why so many women are obsessed with being beautiful is discussed. Many women start to be conscious about their gender when they are very small. They are forced to believe they will be happy if they are beautiful. So they are strongly motivated to be beautiful and struggle for the "happy end," to live with their princes, happily ever after. Bridget always worries about her weight and figure as many women do. Next, the idea of diet is considered. Many women are unnecessarily trying to lose their weights. Bridget thinks Daniel, the man she loves, prefers thinner women as most of the men do. This could be one of the most important reasons why many women start a diet and try to lose their weights. This tendency reminds us of the myth of Pygmalion which is about an idealistic image of ivory turned into a real woman. However, in Bridget's case, it is not Daniel or any other real man who plays as her Pygmalion. Rather fact, she creates a kind of Pygmalion in her mind to drive her to struggle to lose weight and become more beautiful. In the last part of the paper, why Bridget is always threatened with the idea of "beauty" is discussed, and we will see that such "Pygmalion" plays a great role in her mind. Finally, we will see that many women of our age are obsessed with a vain idea of the beauty because we are living in a culture where beauty and the women's happiness are very closely related.

Bridget Jones's Diary にみる現代女性の「美」への意識

02E039 大倉 円

はじめに

多くの女性が「美しくなりたい」、と思ったことがあるのではないだろうか。思った事がない人はほとんどいないだろう。では、「美しくなりたい」と思うときはどんなときで、私たちの考える「美しさ」とはどんなものであるのだろうか。そして「美しく」なるために何をするだろうか。「美しくなりたい」と一言でいっても人それぞれ美しくなりたいところは違うだろう。「髪は長くてサラサラが綺麗」、「目はパッチリが可愛い」、「体型は太めより細い方がいい」、「肌は透き通るような白さが素敵」などとあげればきりがないほどある。実はこれらには共通することがある。それは全て外見についてだということに気付いただろうか。

Helen Fielding の *Bridget Jones's Diary*(1996　以下、『ブリジッド・ジョーンズの日記』)の主人公であるブリジット(Bridget Jones)も「美」について考え毎日を過ごしている女性である。この作品はイギリスの新聞 *The Independent* にコラムとして掲載されていた。家族・会社・恋人の問題を抱え、決意したことをなかなか達成できないけれど、前向きに毎日を過ごしているブリジットに世界中の女性たちが共感し、大ブームとなったのだ。『ブリジッド・ジョーンズの日記』は、日記形式の小説である。32歳、シングルトン（“singleton” 独身)、結婚願望ありのブリジットの日記は、新年の決意を書いたところから始まり、毎日の日記の始めには必ず、自分の体重、アルコールの量、煙草の本数、摂取したカロリー数が書いてある。

この論文では『ブリジッド・ジョーンズの日記』を取り上げ、１章では、ブリジットが、そして世界の女性たちがこれほどまでにこだわる「美」に対する意識はいつからどんな風に生まれてくるのか、ジェンダーとの関係について考察する。「美しさ」の条件はたくさんあるが、その中でもブリジットが最も気にしているのが体重とプロポーションである。２章では、「美」とダイエットのつながり、女性とダイエットについて考える。ブリジットは自分の気になる男性がやせている女性を好んでいる、やせれば何かが良い方向へ変わると信じて、ダイエットに励む。ある男性のために努力し、自分を変えていこうとする意識は、一種の「ピグマリオン効果」と言えるであろう。しかしながら、実際のところは、実在する男性ではなく、彼女自身が彼女の内部に「ピグマリオン」を育ててしまっているのだ。３章では、女性であることと、「美」への脅迫観念、そしてそこから生まれる「ピグマリオン効果」について述べ、現代女性が考えている「美」について考えていきたいと思う。

１．「美」に対する意識

一体いつから女性は「美しくなりたい」と願うようになるのだろうか。少しずつ自分の人生を振り返り、いつから「美しくなりたい」と願うようになったのか考えてみよう。まず、高校に入学し化粧をするようになる。「美」に対してとても関心があった時代だ。中学生の頃は身体が女性らしく成長してきて、自分が女性であることを大いに感じ始めるときであろう。もっとさかのぼると幼稚園時代にはすでに、男の子の好きな番組は「戦隊もの」、女の子は「お姫様もの」という考えが頭に染み付いていたようである。「お姫様もの」で重要なポイントは、主役の「お姫様」は必ず「美しい」ということである。この幼稚園時代からすでに女の子の「美」への関心は深まっていったのではないかと考える。多くの女の子が幼稚園時代に家に帰るとすぐにテレビアニメを見ては、そのアニメに出てくるヒロインに憧れたのではないだろうか。そしてヒロインがしていることを真

似して遊んだりしただろう。テレビアニメの登場人物の男女の違いについて齋藤美奈子は以下のように述べている。

> 男の子の国では、変身とは、ずばり武装の別名だった。女の子の国はちがう。変身とは、武装ではなく化粧、パワーアップではなくメイクアップのこと。別言すれば、女の子の国でいう変身とは、シンデレラの変身と同じ着替えである。
>
> 女の子の国では、変身後の方がプロテクト効果が低く、戦闘には不向きな服装である場合さえ少なくない。足むきだしのミニスカート、胸のガバッと開いたレオタード、先のとがったハイヒール、ひらひらと邪魔なリボンやスカーフ、キラキラ光るアクセサリー（が武器の役目を果たすことが多いにしてもだ）。女の子の国の変身は、そもそもが衣装だけではなく肉体の着替え、つまり「大人の女」への変身を意味する時代が長かった。七〇年代、八〇年代の女の子の国では、変身イコール魔法の力で大人の姿になることだったのである。（齋藤27-28）

上のことから、テレビアニメのヒロインを見て女の子が真似しているのは、動作だけではなく、服装も含まれていることがわかる。魔法がかかったようなヒロインの変身、小さな女の子にとって魅力的でないはずがない。こうしたテレビアニメを通して小さいながらにして、女の子は、自分が「女」であると自覚し、そして「美」は「女の武器」であるという意識は高まっていくのではないだろうか。

この幼稚園時代にすでに「自分は女の子である」という自覚があるということは、それよりももっと以前から「自分は女の子である」という意識が芽生えていたのではないかと考えられる。私たちは生まれたときからどのようにして育てられてきたのだろうか。この世に女性の身体を持って生まれてきたときから、医師や親、周りの人全員に「女の子」として扱われ、育てられてきたのではないだろうか。このように女性の身体を持つがゆえに、「女性」としてジェンダー化され、成長することについて熊田亘は以下のように述べている。

> 実は皆さんも生まれたときから、徹底して「男として」「女として」育てられているのである。たとえば、赤ちゃんが女であれば赤とかピンクのベビー服を着せられ、初節句には雛人形がプレゼントされる。男であれば、青や緑のベビー服に武者人形という具合である。活発な女の子は「もっとおとなしく」と諭され、おとなしい男の子は「元気を出して」と励まされる。ころんで泣きだした女の子は、「よしよし」とあやされるのに、男の子だと「男の子でしょ。泣いちゃだめ」と怒られる。周囲の家族が、そして社会全体がよってたかって皆さんを「男の子」や「女の子」にしているのである。（熊田33）

このように女の子は生まれながらにして、「女」という意識を自分の中に育むように、育てられている。そして「女」であるためには、「美しく」なければいけないという感覚を同時に身につけているのだ。

2．ダイエット：「美」と「幸せ」への必須条件？

はじめに述べたように、「美しさ」の条件には色々ある。髪や肌の美しさ、顔のつくり、そして姿形。現代の女性が非常に気にしている「美しさ」の条件は体重やプロポーションであろう。多くの女性が、必ずしも必要の無いダイエットを試みている。女性は一体痩せることで何を手に入れようとしているのだろうか。答えは「美」と「幸せ」である。多くの女性は、痩せている＝「美」、そして「幸せ」になるためには「美」が必要と考えているのだ。ダイエット（diet）とは本来、健康保持や肥満防止のために、カロリーの少ない食物を食べたり、食物を制限したりすることである（松村 804）。健康になることで「美」につながることもあるが、

単に「ダイエット」は、ただ痩せることであり、そしてそれが「美しさ」や「幸せ」につながると思い込んでいる女性が多いのではないだろうか。

ブリジットもそうした女性たちの中の１人である。ブリジットは「幸せ」について以下のように思っている。

> "It is proved by surveys that happiness does not come from love, wealth or power but the pursuit of attainable goals: and what is a diet if not that?"（P.16）
>
> (訳)
>
> 幸せは、愛・富・力から来るものではなく、達成可能な目標を追求することから来るのだと調査で証明されているんだから。達成可能な目標がダイエットじゃなかったら、いったいなにがそうなの？

これは、職場の先輩であるパーペチュア（Perpetua）が恋人の自慢話をしているときにブリジットが思った事である。パーペチュアは太っている女性である。ブリジットは苦労してダイエットをしても痩せる事が出来ないのに、太っているパーペチュアは幸せそうに恋人の話をするのでイライラしていたのだ。自分が苦労してやっているダイエットを正当化するために、そして痩せれば「美しい身体」を手に入れる事ができ、「幸せ」になれるのだと思っている。

では、ブリジットはどういうときに痩せたいと思うのかについて見ていきたい。ブリジットは毎日の日記に自分の体重を書き、常に体重を気にしている。特にボーイフレンドのダニエル(Daniel)の浮気が発覚したときは、最もダイエットに執着していた。ただ恋人が浮気しただけで、ダイエットをしようとは誰も考えないだろう。それに加えて何か理由があるからだ。ブリジットがダイエットをしようと思ったのは、ダニエルの浮気相手が、"long-limbed"（「手足が長い」153）と形容される女性だったからだ。つまり、浮気相手は痩せていたのだ。実際にその浮気相手を見て、「痩せている」と思いダイエットを始めようと思ったわけではない。ダニエルが自分の部屋で浮気相手と会っているところにブリジットは偶然出くわす。そのときブリジットは衝撃的な言葉を耳にする。浮気相手のスーキー（Suki）がブリジットのいる前でダニエルに、"I thought you said she was thin."（「私、あなたが、『彼女は痩せている』、って言ったと思ったわ」と言ったのである（153）。ダニエルはブリジットの事を彼女に「痩せている」と紹介していたのだ。ここでは「痩せている」ということが女性を紹介する上で重要なポイントとして使われ、また「痩せていない」ことが、恋人に裏切られる大きな原因のように描かれている。そしてブリジットは自分が一番気にしている体型の事を言われ、傷ついた。そして、痩せて美しくなって、ダニエルを見返すという気持ちが出てきたのだ。

しかし、ダイエットをすることが、本当に「幸せ」につながっているのだろうか。ブリジットは減量と自分の人生について次のように述べる。

> "Am going to get down to 119 lbs. again and free things entirely of cellulite. Certain everything will be all right then."　(159)
>
> (訳)
>
> 119 ポンドまで減らすわ。そのうちに体重が減り太腿の脂肪も消えるだろう。そしたら何もかもうまくいくに決まっている。

このように、「痩せれば全てがうまくいく」と思っている。どうして痩せただけで全てがうまくいくのだろうか。しかし、こうした考えは私たちの中にもないだろうか。「なぜ」と聞かれると「理由は無いけれどそんな気がする」といった感じだろう。なぜ私たち女性が「痩せれば全てがうまくいく」と思うのかに関して、山登

敬之は以下のように述べている。

> そもそも美の平等化をもくろむ言説は、「美人は得をする」という不公平感をもとに生まれている。そのような不公平を人々が感じているということは、世間の現実がそのとおりであり、それは、女性が「美」という基準にもとづいて評価され選別されているということである。・・・(中略)・・・どのような職場でも、「美しくないより美しい方が好ましいのではないか」という判断から、「美人であることが雇用の(暗黙の)条件として通用するようになる」。同時に、雇用される側の女性にとっても、「美人であること」は、その他の能力と同等に評価されてしかるべき「長所」となる。(山登　221-222)

社会全体が女性を「美」へ導いている。その中で生活している女性にとって、「美しく」なることは避けて通ることができない課題となる。ダイエット成功の暁には、「幸せ」が待っている。女性は「美」を手に入れることによって、「幸せ」も手に入れられると思ってしまっている。こうした幻想によって、ブリジットはダイエットに励むのだ。そして同じようなその幻想を持っている多くの女性たちがブリジットの姿に共感するのだ。

3．女性の中に巣食う「ピグマリオン」

ブリジットは大好きなダニエルが本当は痩せている女性を好んでいる、痩せて美しくなれば自分を裏切ったダニエルを見返してやれると信じて、ダイエットに励む。ある男性の視線を意識し、彼のために努力し、自分を変えていこうとする意識は、一種の「ピグマリオン効果」と言えるのではないだろうか。「ピグマリオン効果」とはここでは以下のように解釈する。ギリシャ神話に登場するピグマリオンと呼ばれる男性が自分の理想の女性を大理石の彫刻に彫っていた。彼は自分の作った像をあまりに愛したため、それをみた愛と美の女神ヴィーナスが彼の願いを聞き届け、その像を人間の女性に変えるという神話ここの言葉は基づいている。そこから誰かの期待に応えようとする努力が実を結び、その人に進歩が見られること、特に教師の期待に生徒が応える現象を教育心理学では「ピグマリオン効果」と呼ぶ。小野俊太郎は、英文学の中で男性の期待に女性が応え、「進歩」していく物語のあり方を「ピグマリオン・コンプレックス」と呼び、そうした物語の系譜について論じた。

『ブリジッド・ジョーンズの日記』もダニエルという男性の好みに一生懸命自分を合わせようとする女性、ブリジットの物語として読むことは可能であろう。しかしながら、実際のところは、本当に彼女に影響を与えているのは、実在するダニエルという男性ではなく、彼女自身の内部にある「美」への脅迫観念ではないだろうか。別な言い方をすれば彼女は自分の内部に「ピグマリオン」を作り育ててしまっているのだ。ここでは、女性であることと、「美」への脅迫観念、そしてそこから生まれる「ピグマリオン効果」について考えていきたいと思う。

多くの女性は、毎日のように「美しくなりたい」、「可愛くなりたい」と考えている。なぜならば前述してきたように、「美」は女性の最大の武器であり、「幸せ」への必須条件であると多くの女性が幼い頃から意識の中にたたきこまれてきているからである。この場合、「幸せ」の中には、自分の好きな男性と結ばれることが含まれている。そしてその男性の視線、好みに合わせようと女性たちは努力し、「美しく」変身していく。

しかし全ての女性が男性によって「美しく」なるとは限らない。ではどうやって女性は美しくなるのだろうか。ただ漠然と、具体的な目標も目的もなく、「キレイになりたい」、「可愛くなりたい」と願ったことはないだろうか。多くの女性が一度、いや、いつもこう願っているようだ。多くの女性たちの意識の中で「美」と「幸せ」が強く結びついてしまっているために、自分の中に自分を「美」へと駆り立てる「ピグマリオン」を作り育ててしまっている。

男性から見られている自分を意識する自分がいる。そしてその視線を基準に「美」へと励む。「男性によって美しくなる」という面ではピグマリオンの神話やその系譜に属する物語とパターンは同じだが、ブリジットの場合、そして多くの現代女性の場合は、自分の恋人・男友達のように具体的な男性の影響力ではなく、自分の中にある現実には存在しない「他人の視線」で自分を評価する傾向があるのではないだろうか。

諸橋泰樹は、女性の「他人の視線」への意識について、以下のように述べている。

> 現代人が多量の時間とエネルギーと金をつぎ込んでいる化粧、ファッション、そして痩身法や美容整形などは、《身体に手を加え、正統とされる形状に身体を近づけ、人前にさらせるようにするためのあるいは人の規範になるようにするための戦略》と定義される。(諸橋　143)

ブリジットも「自分らしさ」よりも、いつも「他人」の目を意識し、高く評価されたいと望んでいる。女性は自分の中にある「他人の視線」により自分自身を評価する。これは、一種の「ピグマリオン効果」と言えないだろうか。自分の意見は後回し、あるいは無視しているのだが、一方で「他人」の好みを勝手に決め付け、その好みに自分を合わせようと必死になる。それが時には「自分らしさ」を失くしているとも知らずに。ピグマリオンの神話は、男性が自分の理想の女性を作り上げていく物語だが、ブリジットの物語は、「男性はこういったものが好みだから」と自分勝手に思い込み、「理想」の自分自身を作り上げていくのだ。つまり、私たちが考えている「理想の自分」になるように心の中で呼びかけているのが「ピグマリオン」なのだ。よく女性向け雑誌に「男性の好みはこれ」と選ばれた服装や化粧の方法が載っている。ここで定義される「美」の基準は一体、誰が決めたのだろうか。日本中の男性全員にアンケートをしたわけでもなく、男性全員が同じ好みでもないのに、「これが男性の好きなもの」と言われると女性はこれに惑わされてしまうのだ。

ダイエットに励む女性も同様である。「男性は痩せている人が好き」という根拠のない意見はどこから来たのだろうか。例えば、雑誌に載っているモデルたちは皆、スラッと背が高く痩せていて、多くの女性の憧れであることは確かである。しかし、男性から見ても全て同じ意見だとは限らない。しかし女性は、自分自身の好みと男性の好みを混乱して受け取り、「男性は痩せている人が好き」と思い込み、痩せようとするのである。

ある日、ブリジットが一気に約４キロ痩せたことがあった。ブリジットはとても喜んで、ほっそりした身体を見せびらかすためにピッタリとしたドレスを着てパーティーに出かける。そこで親友のジュード（Jude）から思いもよらぬことを言われてしまったのだ。

> "God, are you all right?"….. "You look really tired." (91)
> (訳)
> 「まぁ、大丈夫？」・・・「とても疲れているように見えるよ。」

同じく親友のトム（Tom）からも以下のように言われる。

> "Are you all right?"….. "I think you looked better before, hon." (92)
> (訳)
> 「大丈夫？」・・・「前のあなたの方がいいと思うよ。」

痩せた姿を誰もが「美しい」と認めてくれるというブリジットの期待は見事に裏切られてしまったのだ。何よりも大きな目的としていた減量成功の結果は、とても空しいものだった。

"Eighteen years of struggle, sacrifice and endeavor — for what? Eighteen years and the result is "tired and flat." I feel like a scientist who discovers that his life's work has been a total mistake." (93)

(訳)

戦い・犠牲・努力の18年間は何だったのだろう？これらの結果が「疲れていて元気が無い」。まるで一生をかけてした研究が全くの間違いだったとわかった科学者になった気分だわ。

痩せて自慢できる身体になったと思っていたのに、誰一人として痩せた事を褒めてくれる人はいなかった。褒められずにジュードとトムに心配されてしまった。痩せればキレイになれる、皆からの評価が高くなると思い込んでしまっていたブリジットは失望する。

フランシス・バーグは、若い女性たちの過剰なダイエットの取り組みを危険視し、どうして多くの女性たちがダイエットや痩身へと駆り立てられるのかについて、以下のように分析している。

フェミニストの視点に立つと、「痩せ」の押し売りは、女性が職場で権力を獲得することを阻害するための巧妙な操作的道具として映ります。この茶番劇は、なにも個々の男性によって、彼らの女友達や恋人、妻、姉妹、娘たちのうえに延々と演じられているものではありません。女性を常に自分の外見に不満足な状態にすることで、彼女たちを究極的な消費者に造りあげることに傾注している政治的な権力構造と多国籍企業によって演じられている、とウォルフは述べています。感覚的に麻痺した状態のなかで、メディア、特に女性雑誌やその広告担当者をとおして大袈裟に演じられているこの茶番劇は、総じて女性たちに痩せと美のための終わりのない競争を強いているのです。それは残酷な闘いであり、彼女たちに勝利はありません。この闘いのなかで、全ての女性は、身体と顔を完璧にしようという試みが失敗したという気分にさせられます。たとえ彼女の成功が人生の他の領域にあったとしても、彼女には不十分なのです。彼女は自分の身体が常に人目にさらされていて、不愉快に評価されていると感じているのです。（バーグ 168-171）

ブリジットもここで述べられているように、幻の「美」を追求する終わりのない戦いのためにエネルギーを費やしてきた女性の一人と言えるだろう。ここで、女性向け雑誌の効果について述べられているが、女性たちはショーウィンドウの最新ファッションや、女性雑誌のスリムなモデルによって、「もっと痩せるように」と叫ぶ自分の内部の「ピグマリオン」を育ててしまっていると言えるだろう。

前文でも述べたように、私たち女性は、意識的にあるいは無意識的にもファッション雑誌やショーウィンドウのファッションやモデルの姿を目にする。そしてそれらによって自分の似合う服のイメージを膨らませていったり、流行を知ったりすることが多い。服はどんな体型の人が着てもいいはずなのに、日本の雑誌のモデルもショーウィンドウのマネキンもスリムな身体ばかりだ。まるで「やせている人が着ると似合う」という無言のメッセージを送っているようだ。「雑誌で見ると可愛いのに、自分が着ると・・・」という経験はないだろうか。スリムなモデルで服を良く見せても、実際は世の中痩せている人ばかりではないので、このようなことが起きてしまう。

特に日本の雑誌では「美」に対して一方通行ではないかと思われる。一つの例として、オーストラリアで出版された COSMOPOLITAN のある号をあげてみよう。ここでは「美」は誰にでも該当するものだ。図1と図2を見比べると図2は日本の雑誌ではあまり見られない体型だ。私たちの周りには様々な体型の人がいる。そしてその人たちそれぞれに違った「美しさ」がある。「美」は1つではないのだ。このような雑誌では「美」には多様性があることをしっかりと表していると言えるだろう。

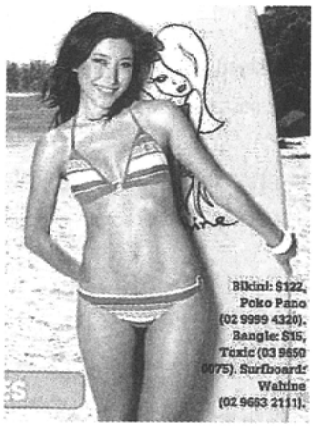

図1

図2

結　論

現代の女性たちの大きな共感を得た『ブリジッド・ジョーンズの日記』を取り上げ、女性たちの「美」への意識、そして「美」に対する脅迫観念について考えてきた。「美」を追求する上でブリジットはダイエットに励む。しかし、ダイエットの成功は彼女にとって空しいものであった。ブリジットが、そして世界の女性たちがこれほどまでにこだわり続ける「美」に対する意識は、いつからどんな風に生まれてくるのか。女性たちは生まれたときから「女性」であるという意識を様々なメディアを通して身につけ、加えて「女性は美しくあるべきだ」と思う。そして「痩せている」ことは、数ある「美しさ」の条件の中でも最も重要なものの一つであるというメッセージを女性たちは、女性雑誌などのメディアを通して学んでしまう。

「美」と女性の「幸せ」は強く結び付けられ、「痩せた」身体は「幸せ」をつかむための必須条件であるとブリジットは思い込む。ブリジットは愛するダニエルが痩せている女性を好んでいる、痩せれば何かが良い方向に変わると信じて、ダイエットに励む。ある男性のために努力し、自分を変えていこうとする意識は、一種の「ピグマリオン効果」と言えるであろう。しかしながら、ブリジットの場合はむしろダニエルの視線ではなく、彼女自身が彼女の内部に作ってしまった「他人の視線」が大きな影響を与えているといえるだろう。言うなれば、自分を「自分の理想」に作り上げようとする「ピグマリオン」を自分の内部に育ててしまっているのだ。多くの女性たちは、「美しく」なるために多大なエネルギーと時間を惜しみなく費やす。しかしながら、「美」とは絶対的なものではなく、むしろメディアを通して作られたものであることがわかる。『ブリジッド・ジョーンズの日記』に共感した女性たちは、幻の「美」を追求し、努力するブリジットと自分を重ねる。しかしながら、ブリジットは自分の気づかないうちに、自分なりの「美しさ」を持っていて、それに気がつき、評価してくれる人が彼女の前に現れる。このことが追いかけても追いつけない幻の「美」を求めて奔走する多くの女性たちに希望を与えるのだ。

註

（1）図1、2　*COSMOPOLITAN*　(published in Australia) January, 2004.より

テキスト

Helen, Fielding.　*Bridget Jones's Diary* (1996).　London: Penguin, 2001.

引用文献

バーグ, フランシス『ダイエットへの警鐘』　東京：セイエンティスト社, 1998.

熊田　亘　『男と女』　東京：ほるぷ出版, 1991.

松村　明. 山口　秋穂. 和田　利政　編　『国語辞典　第九版』　東京：旺文社, 1998.

諸橋　泰樹　『雑誌文化の中の女性学』　東京：赤石書店, 1993.

小野　俊太郎　『ピグマリオン・コンプレックス』　東京：ありな書房, 1997.

齋藤　美奈子　『紅一点論』　東京：ビレッジセンター, 1998.

山登　敬之　『拒食症と過食症ー困惑するアリスたち』　東京：講談社現代新書, 1998.

（卒業論文指導教員　杉村　使乃）